

美しき保育士を
園☆が苛み辱め食す



園田大造

始めに

例の如くにご挨拶申し上げます。作者の園田大造です。この度は拙作をお買いだき、お礼申し上げますが、この作品には残虐な表現が含まれている、というかしらございません。苦手な方は今からでも遅くはありませんので、どうか思い止まってください。

今回は短大を出てなりたての保母が、自分の世話をしている幼稚園児の女子に苛まれ辱められ、挙句の果てに食べられてしまう、いつもにもましてとんでもないお話です。もちろんいくら何でも幼稚園児が単独でそんな大それたことなんてできる訳がなくて、気紛れに娘の参観にやってきた裏社会大ボスである父親が子の保母にすっかり魅了されたのがきっかけで、そうなるやと当然拉致して苛もうという話になり、娘もむしろけしたててきて、嬉々として苛んできて、結局なるようになってしまいます。

ともあれ楽しんでいただければ、作者としてこれに勝る喜びはありません。

作者敬白

一、首謀者は五歳児

2P

十三、いきなり有刺鉄線で

180P

二、もちろん裸にする

7P

十四、宣告までしたからには

198P

三、言い聞かすのも五歳児

25P

十五、こうしてさらに徹底的に

216P

四、やたら鞭で打ちのめす

28P

十六、見せつけてこんな事を

233P

五、さらには奴隷になれと

46P

十七、蟻を浴びせるのも

237P

六、そして屈服しても

63P

十八、鰯り殺しだけに執拗

255P

七、食る前に鍛える

80P

十九、この期に及んでもこんな

272P

八、ただ食るだけではなく

97P

二十、最後の料理もこんな事を

275P

九、女にしたなら色々と

114P

十、奴隷には奴隷らしく

130P

十一、ポ☆ニーの後でコウノトリ

147P

十二、噛みついたなら懲罰

163P

一、首謀者は五歳児

Q市郊外にある洋館造りのその屋敷は通称人食い屋敷という、住む者にとつては余り有難くはない別称の方がまかり通っていた。もちろんこんなうわさが流れるほどだから、かつてこの屋敷で何人もの娘の猟奇殺人があつたのだが、死体は二度と発見されなかったから未だに発覚していないのだ、主人がメイドの美少女を些細な咎を理由に嬲り殺したからその霊が今でも屋敷の中をうろついていて、時折無残な絶叫や命乞いをする声が聞こえてくるのだ、果てはあの屋敷の地下には財宝が隠されていて隠す際秘密を守るために自害した武士が屋敷に立ち入った者を片端から切り殺していると言つた、それこそ好き放題なことが言われているが、屋敷の主の白銀官兵衛もその家族たちもそんな他愛もない噂話になどびくともするものではなくて、むしろ屋敷に人が近づかなければそれもまた結構くらいに思っている。というのも他ではない、白銀官兵衛は悪い奴だったからだ。

白銀官兵衛は一見すれば壮年のロマンスグレーの紳士で温厚そうだったが、そもそもサディストの変態なのだから、それだけでも碌でもない奴に決まっている。表向きは小さな不動産やクラブや風俗店の経営をしている事になっているが、実は地域の裏社会の押しもあされぬ大ボスの一人で、闇金や違法薬物の販売、売春はもちろんの事、何をやっているのか分からないが高名な政治家や芸能人、経済人などが頻繁に出入りしていると噂される秘密クラブを経営する事で強烈で強力なコネクションを形成しているとの専らの噂で、こうなるとどこまでが本当でどこまでが噂だか分からなくなってしまうそうだが、こんなうわさがあるくらいだからとにかく悪い奴には違いない。そして妻の節子は昔は美人だったのには違いないが、今はただのどっぷりと太っている中年女で、いかにも貪婪そうなのに加えて多情そうな中年女で、もちろんサディストの変態だから貞操観念など最初から持ち合わせていない官兵衛と、まさしく割れ鍋に綴じ蓋で夫婦仲は極めて円満という不思議な事になっているばかりか、むしろビジネス上の最上のパートナーとなっている。また息子の真智太郎は有名大学を一昨年出たばかりのびっくりするような美男子の若者であり、長女の紀伊は二十歳過ぎの美人だったが、真智太郎はその全身から発散している悪魔的な雰囲気は隠しようがないし、紀伊ににして美人なのは間違いないが人間らしさを全く感じさせないそんな娘だ。そして次女の安威はといえば未だ五歳の幼稚園児に過ぎないのだが、身長は五歳児相応なのに頭部は大人並で、それだけでも相当にグロテスクなのに頭が上に行くほど大きくなり、異様に広い額に静脈が幾筋も浮かび、金壺眼の上に花はねじ曲がつて胡坐をかき、唇は三つに裂けて歯茎の一部が絶えず剥き出しになり、ただでさえグロテスク極まりないのにこれが五歳なのだからなおさらグロテスクで、そしてこの安威が全てのきっかけだったのだ。

いくら鬼畜な変態サディストだつて娘は可愛いのに決まっているし、それが娘ともなれば、そしてこともあろうにこんなにも醜ければなおさら可愛いらしい。となると安威の通う幼稚園の行事にも、本当は母親ひとりでもいいのにもかかわらず夫婦揃って出かけていたのだが、この安威の担当となつた、今年短大の保育課を卒業して保母となつたばかりの沢井奈緒美という保母に、夫婦そろってすっかり魅了されてしまったのだ。ただしこの沢井奈緒美という二十一歳になりたての保母は年の割には初々しくて可憐な顔立ちだがもちろん十分すぎる程に美しい。さらに体つきは、こんな言い方はいささかご例があるしレトロなのはわかっているが、グラマラスで胸や腰の辺りにはなんとも言えないボリュームを

感じさせ、その初々しく美しい顔とのコントラストがさらに彼女の魅力を増しているように感じられる。そして何よりこんなにも醜い安威にも分け隔てなく対応してくれるのは当然としても本当に子供好きなのは幼稚園での振る舞い一つ見れば如実に伝わってくるし、優しくて誠実で真面目な性格なのも一目でわかる。しかも白銀たち夫婦がそんなやばい存在なのを理解しているのかいないのか、それとも余程人が良くてある種の天然なのか、他の園児の家族たち同様に接してくれるのともかく、本来の姿を分かっている距離をあけている他の夫婦との仲立ちの様な事までしてくれて、おかげ手官兵衛も節子も前よりずっと幼稚園を訪問しやすくなったほどだ。

「私ってね、あの奈緒美先生をいじめてあげたくて仕方がないの。パパやママ、兄さんや姉さんたちに、もちろん私だって加わっていじめられたり苛まれたり、もつというんなひどい事をされて泣き叫んで泣き狂って、悶えたりのたうったりする様を見たくて見たくてたまらないのだけれども、これってやっぱりおかしいのかな。」

ある日の夕食のとき、唐突に安威がそんなことを言い出すものだから、一緒に食事をしたいた父の官兵衛に母の節子、兄の真智太郎からびっくりするし、姉の紀伊は食べていたものを吹き出しそうになるし、それから給仕をしていて紀伊のグラスに水を注いでいた料理人でありメイドでもある真野まのんはそのままコップからあふれるままにしてしまうし、料理を運んできていた執事の田井和明もその場に立ち竦んでしまう。もちろん五歳児がこんな事を言い出せば普通ならばおかしいのに決まっているが、何しろこんな家族なのだからそこはおのずと違った対応にならざるを得ないし、態々妹の幼稚園に顔を出す訳のない真智太郎や紀伊はともかく、すっかりその奈緒美に魅了されていて劣情と嗜虐心をたぎらせていた官兵衛と節子はその顔を見合わせてにやりと一際おぞましい笑みを浮かべるとまず節子が何とも気味の悪い猫なで声で、

「もちろん安威だって他の幼稚園のお友達をいじめたりしてはいけないって習っているはずよね。それはそれで間違いないけれども、でも安威みたいに無関係に人をいじめたくなまらない。特に奈緒美先生みたいな素敵な先生を思い切りいじめ苛みたいって人間がいるのは間違いないのだし、実際安威だってそうなのだから、おかしいことではないのよ。」

などと話しかけてくる。

「それにね。いけない事だからなおさらしてみたいって人だってやっぱりいて、こんな人たちはいけない事だからこそたくさんお金を払ってくれて、実を言えば私たちがこんなに豪華に暮らせるのはそのためだから、益々おかしい事の訳はない。むしろ人間としては自然なことかもしれないわね。」

「だとしたら私が奈緒美先生を捕まえて閉じ込め定時たりしたってそれはいけない事だけれど、でもおかしい事ではないって、そういう事なのかしら。」

そして節子の言葉尻を取らるように安威が言うものだから、節子もちよっと困ったような顔になるが、すぐに真顔に戻って、

「そうよね。確かにどこをどうとったって悪くない奈緒美先生を捕まえて痛い目にあわせたり外しい目にあわせたりしてそんなことしていい訳がない、そのところは安威もしっかりと覚えておかないといけない。でも世の中っていけない事もなければ上手く回らないから、私たちが存在する。そう、いわば野菜炒めの中のピーマンみたいなものかな。」

などという安威はやっぱり不思議そうな顔をして、

「ふうん、私はピーマンなんてなんであるのか分からないし世の中からなくなってしまっても構わないと思っている。けれどもピーマンってあるのだから美味しいと思う人もいるのだろうし、ないと困る人もいるのかな。そしてパパとママはそんな存在なのね。何だかわかって様な気がする。」

などといささか天真爛漫に言うが、しかし今度は真智太郎や紀伊が分かったような分からないような顔をしている。

とはいうもののこの二人はこの安威を担当する保母の沢井奈緒美という保母が堪らず美人で魅力的だと言う事は知っているし、もちろん幼稚園のイベントの写真を見せられて、なるほどその言葉に嘘はないとも分かっていても、実物は目にしていけないからそれだけ鬼畜な想像力は激しく刺激されている。

「僕たちが野菜炒めのピーマンだって言われて『はいそうですか』という訳にはいかないけれど、でもそんなに素敵な保母さんならば僕たちだって実物を見てみたいな。そしてパパとママがそんなに素敵だというのだし、安威までそんな事を言い出したからには、本当に連れてきてやつてもいいんじゃないかな。」

「私も実はそう思っていて、こうして三人の話を聞かされるばかりだったら私たちだってだんだんとフラストレーションがたまってきた我慢ができなくなりそうだもの。いつそのこと拉致して拷問して辱めてやらなくっちゃ。」

それでもう一端井所の鬼畜のこの二人はもうたぎっている事を隠そうともせずそんな事を話していて、安威はというと何が何だか分からないにその目と顔をぎらつかせているのだが、何しろこんなグロテスクな容姿であり顔立ちなのだから、その様子さえなんとも言えがおぞましい。

「ふふふ、なるほど我々は野菜炒めのピーマンか。ただしピーマンは嫌われるだけ毛でいけないものでも何でもないから、たとえとはいささか不穏当かもしれない。とはいうものの我々がやっている事はいけないことだと言う事、そして世の中に全く無意味ではない事は分かせねばなるまい。」

「と言っても五歳の女の子に対してサディズムを理解しろというのも無理だし、まして我々はそのサディスト相手に無辜の美女や美少女を捕らえて拷問し陵辱する秘密ショーを開催して実利も得て、また参加者のコネクションを作る事によりさらに距離を得ている事などを説明した処で、とても理解できるとは思えないからな。」

などと言うものだから、かぞくのものたちはもちろんメイド兼料理人の真野まのんや執事の田井和昭までひっくり返りそうになり、続いて声をあげて笑う。ただしこれだけでは終わらなくて急に真顔になるなり、

「ただしもしかして安威をととても可愛がってくれていて、安威もまたとても懐いているかな。もしも我々のビジネスのターゲットにしたりしたら安威が悲しむのではと思ひ出すのを控えていたのだけれども。」

というと節子がその後を引き取って、

「しかし安威の口からそんな言葉が漏れると言う事はそんな心配は不要みたいだし、むしろとっても喜びそう。それにこんな素敵なお嬢さんならばさぞかしみんなも高い金を払って集まりそう。」

などと話してくるがその目と顔はさらに一層残忍な歓喜と興奮に早くも激しくぎらついている。

ただただ一人で置いてけぼりにされてしまった格好の安威は、自分がきつかけになつて周りの者たちは勝手に盛り上がっている事そのものが嬉しくて面白くて、ただしどうやら自分の希望通りになっているのかどうかやっぱり気になるらしい。一体どんな話になっているのかいささか気になるらしくて、

「私だって馬鹿ではないのだし、パパやママ、お兄さんやお姉さんにまのんや田井まで加わって、それにパパの家来たちまで加わって、見たこともないけれどお金持ちらしいお客さんを集めてどんなことをやっているのかくらい分かっているのよ。でも私だってそんな事が大好きみたいだし、それに大好きな奈緒美先生があんなに遭うと思つたら、それだけでゾクゾクしてくるしなんだかとても気持ちよくなりそうなの。で、さ。和多留の先生を再ませてあげるから理に、私もあれに参加させてくれない。さもなければ私、奈緒美先生にこの事を言いつけちゃおうかな。」

などともんでもない事を話してくるから、これには官兵衛もあきれたような顔つきになっている。

「まさか五歳児の娘に脅迫されるとは思わなかったし、そんな事を言いつけられたって奈緒美先生だって困るだろうな。まああの先生ならばその顔を見てみたい気だつてしなくはないのだが、それよりも自分が担当している五歳児に苛まれて泣き狂ったり泣き叫んだりする奈緒美先生の方が遥かに見てみたいからな。という訳で今度はあいにも頑張つて貰うとするか。」

そしていかにも面白そうに言うから、節子や真智太郎は何だか娘を生贄を苛む小道具としている事になんとなく釈然としないような顔つきをしているが、紀伊はもろにそれに面白そうな顔つきだし、肝心の安威が誰よりもその顔を激しくぎらつかせているのだから、ま、それでも仕方がないかといった顔つきだ。

沢井奈緒美はその夜は夏祭りだったから、短大時代の友達二人と浴衣姿で出かけていた。ほんのちよつとぽつちやり系ではあるものの初々しい色香に溢れるよう容姿といかにも純情可憐な顔立ちに紺色に桔梗と菊、ススキなど秋草をあしらった浴衣に山吹色の半幅帯はそんな彼女にぴったり似合っていて、本来ならばスタイル抜群な彼女の魅力を目立たなくさせるはずの浴衣だが彼女の初々しい可憐さを十二分に際立たせている。ただし奈緒美は祭りとなると本来の食いしん坊がむくむくと頭をもたげてきて、綿菓子から杏飴、由来はこの上なく怪しい富士宮焼きそばなどを次々に貪り食って、一緒に来た友達を呆れさせている。

「本当に奈緒美ったらこんなにかわいいのだから、男だって誘つてら二人や三人ホイホイついてくるはずだから、どうして私たちなのかと思つたら、こういう魂胆だったわけだ。」

「それにもつと言えば自分一人だけで爆食したら目立つから、私たちは格好の隠れ蓑つてわけね。ま、連れていく彼氏もいなくてついていく私たちも私たちなんだけど。」

「でもまあ奈緒美と一緒にいたら何となくウキウキしちゃうから不思議なのよね。」

そして三人のやはり浴衣姿でそれなりに決めてきて友達は呆れたように言うが、今度は胡瓜の一本漬けをかじっている奈緒美はどこ吹く風と言って様子で、

「まあ入った幼稚園にだって男性職員だつていない訳ではないけれど、皆叔父様の妻帯者ばかりなのよ。後は園児の父親は当然男性だけでも、これは当然論外だし。それに私つてこれでも結構理想が高いんだからね。」

などとしやべっていて、口ではそんな偉そうなことを言っではいても、奈緒美が実は大変な恥ずかしがり屋だし、とくに多少でも好意を持っている異性の前では真っ赤になって碌々口もきけなくなってしまう事を知っている友達たちは、ニヤニヤといかにも面白そうな笑みを浮かべている。そして奈緒美は屋台の並びの中に何かを見出したに違いない。突然、

「あつ、オタルのばんじゅうだ。」

というなり人ごみの中に駆け出してしまい、そもそも『オタルもばんじゅう』が何だか分からない友達たちはあつけにとられてその後を見送っている。そしてそれが彼女の姿を見た最後となる。

十九、この期に及んでもこんな

手足を半ばから筆りとられてしまった沢井奈緒美は、肉やら骨がぐちゃぐちゃになって見苦しくなっている手足の断面を、ついでに左右ばらばらだった位置まできれいに切り揃えられて、床の上に荷物の様に頃が、されていた。もちろん最大の見せ場である処刑という料理、あるいは料理という処刑かも知れないが、を前に出血多量などと言うつまらない理由で死んでしまわれては面白くないから、止血処理だけは丁寧に施されていたし栄養剤や精力剤もたっぷり施されていた。さらにはその無残さを際立たせるために違いはない、その傷口にぼろ布のような包帯を巻きつけられていたから、床の上に転がされているその姿はどこか壊れた人形じみたものさえ感じさせる。そして何しろあんなにひどい目にあつた娘だから、そんな姿さえもなお一層刺激的だったに違いはない、男たち、鶴居や黒亀たち客たちや、権助や具足蟲たち手下たち構わず男たち入り乱れて、その唯一使い物になる口腔を激しく陵辱されていた。当然こんな自分でも信じられないほどに無残な姿にされ、その上におおんな惨めな愛撫を強要されるのだから、やっぱり惨めで悲しくて口惜しいに違いない。その閉じられている目からは大粒の涙が次々に溢れ出ていて、そして男性従業員たちはさらに一層面白そうだ。そのときにその口腔を貪っているのは執事の田井だったが、撮影担当と言う事で拷問にも大して加われず、それだけそれだけに劣情が煽られているに違いない、いよいよ面白そうに、

「ふひひ、女の子の処もだめ、尻の穴もだめだって事になったら、ここしか男を楽しませる処はないのだからよ。もしここもだめだったらそれこそ殺してその加増を公開するしかないとなっちゃうからな。ひふふ、もつともつと頑張つてその舌を動かすんだ。さもないと…、ふふつ、分かっているな。」

などと声をかけている。

奈緒美はいよいよ口惜しくて惨めだが、それでもやっぱり殺されるのはもつと恐ろしいし、それにこんなにされて殺されてしまうなんてあんまり惨め過ぎる。哀れな娘はグロテスクな肉塊にふさがれた口で無残に呻きながら、なお死に物狂いでその舌を動かし続けているのだが、もちろんその口腔を貪っているのはこの男一人の道理がなく、それにそもそもの男が最初の訳もなくって、それどころか余ほど男のものへの愛撫を強要されたに違いない、その顔は汚辱の粘液に塗れているし、愛撫させられている彼女の口の端からも無残に滴っている。そしてさらにその順番を待ちかねている者だって当然いて、

「おいおいお前がそうやって堪能するのもいいけれども、好い加減な処でこちらにだって回すんだぜ。何しろお前一人のための奴隷家畜の訳ではないのだからな。」

「それにこんな姿にされてしまうその前ならば、二馬力でも三馬力でも可能だったけれども、こうなったらそこの箇所しかないから後がつかえるのは当然だろうが。」

「それに幾ら官兵衛氏だってそうホイホイ獲物をさせてくる何できるものではないからよ。」

などと声をかけて、そしてその男もそれはそのとおりだと思つたらしく、髪を鷲掴みにして体を引き起こしたままで一際激しく腰を揺すつてこの感触をさらに激しく貪つておいて、そしてその口腔内に激しく果てるなり、早速次のものへと変わるが、しかし奈緒美はいよいよ耐えられなかったに違いない。

「お願い許して…殺さないで…許して下さい…うあうう…あうう…お願いです…ムグムグウウウウ…ムググウウウウ…あぐうえ…むぎうぐ…ングゲウウウウ…」

ここぞとばかり必死で哀願しようとするが、しかしその口腔には早速次の男の怒張している肉塊が激しく捻じ込まれ、それはまたも無残な呻き声へと変わって、ついに諦めてしまったのか、その呻き声さえも聞こえなくなってしまうて、その男もいよいよ面白そうだ。

「いくらそんなに哀願された処で、まさか俺が担ぎ上げて連れ出す訳にはいかないし、そんな事をしようものならば俺様が袋だきになってしまうからよ。それら第一お前が戮り殺しになる処を俺だって見てみたいし、その体を見てやっぱり美味しそうと思つていた口だからよ。」

そしてそんな事をうそぶきながら、いよいよ一層の激しさでその腰を揺すり続けている。そしてその頃には女たちもやってきて、そんな男たちと一緒にその様よ存分楽しんでる。

「ところでこれ以上ハードにやりようがないと言うくらいにハードにいたぶり苛んできたけれども、それに画像にして売りさばこうというのは分かつているけれども、やっぱりこんな美人を苛むのを俺たちばかりというのは余りに勿体なくはないか。ましてその肉を食らおうというのだったらたつたこれだけではどうせ食べきれない。ちゃんと考えているのだろうね。」

そして官兵衛の妻の節子がなおさら一層面白そうにそんな事を話していて、と権助が益々面白そうだ。

「それについては今官兵衛氏と田井と真智太郎坊ちゃんが色々話し合っているみたい。でもその結果によつたらば、やっぱり生かしておいて楽しんでいた方が良くと言う事になるためには、残っている口での愛撫がよほど上手でなかったらな。」

そんな事をなおさら面白そうに言い、そうなればもちろん他の者だって黙ってはいられない。

「そうそうあそこも肛門ももう使い物にならないからな。でもその為にはまず俺たちを喜ばせなければな。」

「なるほど万一俺たちを味方につける事が出来たならば、戮り殺しにするよりもいかしておいて楽しもうと言う事にならないとも限らないな。まあ口だけだからそれだって並や大抵ではないが。」

などと口裏を合わせてきて、その言葉に刺激されたかのように一層必死で舌を動かし始めた奈緒美の姿にいよいよ残忍で面白そうに視線を浴びせている。そして他の女たちだっていよいよ容赦はない。

「そうなんだ。でも私の心持からしたら、もう金の事なんてどうだっていいから、こんなになつてしまった奈緒美お嬢様がどんなに無残に戮り殺しになっちゃうか、そっちの方が余ほども見てみたいんだよね。」

そして男たちばかりか女たちの間からさえもそんな事場が起こり、奈緒美は再び激しく泣きじゃくりながら、いよいよ必死になつてその舌を動かし続けている。

「ほほう、参加人数百人にもなるのかい、パパ。一人二百万として二億円、これはこれとはんでもない大儲けだな。でも奈緒美だつてポリューム満点だからそれ位はいないと大量に食べ残して勿体ない事になりかねないか。」

「いや、一人三百万なのだが……。それにしても視聴料の収入が全体で六億くらいは見込めるから会員たちの取り分が合計二億、一人辺り一千二百万で十分元は取れているうえに、またも我々の結束は強固なものになるという訳だ。」

「いやいや、そんなものが開く事ができるのは、世界中のサディストたちと繋がりのある官兵衛氏ならばこそで、我々だけでは逆立ちしたってそんなものが開けるものではない。だとしたらそれは官兵衛氏の才覚と言うものだから、我々の分け前も取り分もへった暮れもあったものではない。」

その一室ではどうやら明日の出席者らしいリストを前にして、官兵衛に真智太郎に田井、メイドとしてというより料理人として真野まのん、さらに客たちを代表するらしい鶴居も加わつていよいよ一層面白そうにそんな話を話し合っている。もちろんこの連中にしても出席者が少ないよりも多い方が気持ちが良いのに決まっています、その目と顔はなおさら一層激しくぎらついている。しかしそれでも鶴居はちよつと心配そうに、

「それにしてもこれだけの人数が参加してセキュリティは大丈夫なんだろうな。ここで警察の手が入ったら私だって助けられないし、そもそも私まで煽りを食らって破滅しなければならなくなる。そんなのは御免被るぞ。」

などと傲然と言い放ってくるが、官兵衛は平然としている。

「もちろん我々もなまじな素人ではありませんからな、鶴居先生。もちろん身元については十分に調査をしており、いずれも脛に傷を持っている我々が首根っこを押さえている人物ばかりですら安心して参加いただきません。とはいってももの言っている私もいさか不自然なものを感じずにはおれません。」

「なるほどそれを聞いて安心した、と言ってもそれで安心するというのも妙なものだ。とは言えそれだけの人間が集まるとなれば、奈緒美はただでは済むどころか、ことさらに残忍無惨に苛まれる水戸になる訳だ。ふふふ、可哀相に。」

そして官兵衛がなおさら一層面白そうに言う。鶴居もそれに輪をかけて面白そうに話している、ただし鶴居はなおさら面白そうに気持ちよさそうに言葉を続けて、

「それにしても我々がこうして話している間も奈緒美はさぞかし仲間たちや官兵衛氏の手下たちに凌辱され抜いていて、そしてきつと死にたくなければ俺たちの好きになれくらない事を言っていて、そして奈緒美はなおさら死に物狂いで男たちにサービスしているのだろうな。ところでまのん、安威のおかげでまた出番だが大丈夫だろうな。」

などというとまのんももちろんその気満々だがわざと何も言わずにことさら残忍でおぞましい笑みを浮かべて、ここでこうしている連中でさえなおさら一層嗜虐心を刺激されて煽られていても立つていられなくなる。

そしてそんな事が話されて自分の運命はもう勝手に決め付けられていることも知らず、奈緒美はなお死に物狂いになって男たちの命じられるままに、次々にその口腔に捻じ込まれてくる肉塊に屈辱の、それでも死に物狂いの愛撫を繰り返していた。そしてもちろん官へ絵たちがこんな極上の獲物を今更助けようなどという訳がない事は分かり切っていて、そしてそれだけに一縷の望みをたくしてい死に物狂いで愛撫する奈緒美のその有様がさらに一層刺激的なのに違い、涙を次々に溢れさせながらなお死に物狂いで愛撫する哀れな生贄の姿をたつぷりと堪能しながら、さらに自分たちの嗜虐心まで激しくたぎらせている。そしてそれにすぐに官兵衛や鶴居たちも加わって、凌辱はなおさら激しく盛り上がって続けられる。

二十、最後の料理もこんな事を

広大な草原となっている岬に立っている広大な割には瀟洒さも失わない洋館の前に広がる芝生の広場は、恒ならぬ多数の客たちの到来で思わぬ賑わいを見せていた。もちろん責めに参加していた保守系の大物代議士や往年の映画スターやヒールのプロレスラーやいった連中、もちろん一際けばけばしく装っている華道の家元と女社長も含まれる、は元より、他にも七、八十人に及ぼうかという人物が参集しここそこで会話を楽しんでいる。そしてどうしてこんな高価なのか常人に理解できる道理のないヴィンテージもののワインや高級シャンパンが景気よく空けられ、キャビアやフォアグラ、アンチョビーやスモークサーモンなどを使ったカナペやグリオール・パイ、シーザーサラダ、オマール海老の冷製などのオードブルやホースラディッシュ入り生クリームを添えたローストビーフ、鴨のオレングリなど料理が惜しげもなく振舞われていて、そして官兵衛たちはさすがに如才なく客たちと何事か歓談などしているが、しかしこんな配慮し或いは不要だったかもしれない。その中庭には『キ』の字型の白木の礎柱が立てられていて、そこには今回の生贄である二十一歳の美しく可憐であり純真無垢な保母、たまたま担当した園児が鬼畜の頭領だったと言う事以外こんな目に遭わねばない理由などどこにもない沢井奈緒美が、その苛みぬかれた上に手足を半ばから筆り取られている体を大の字に広げて、その裸身を余す処なくさらして縛り付けられていたのだ。もちろんこんな姿にされて恐ろしくてみじめで恥ずかしいのに決まっているが、しかしもう哀願することもできずにつくりうなだれて細かに震えていて、さらに静かに閉じられている目からは玉のような涙を次々に溢れさせていて、もちろん客たちの視線を否応なく集中させて、官兵衛たちが対応してさえ相手の視線はそんな奈緒美の方に頻りに向けられている。

それにしても奈緒美の姿は余りに無残で、白く滑らかだった肌は一面に抉られ蝕まれて掻き毟られてその面影もないし、その豊かなこんなになっても美しい乳房も傷まみれな上黒々とした傷がその様を一際無残にし、大きく広げられている女そのものも肛門も殊更残酷に苛まれているうえに所々焼け焦げてしまっている。さらにその下腹部には菱に髑髏をあしらった焼き印が押されて、さらに乳首と局部には銀色のリングがはめられて陽光にきらめいていて、その姿をさらにどうしようもないほどに無残にしている。しかも奈緒美は今更繰り返すまでもないが、美しい中にもあどけない可憐さを漂わせて魅力的だし、手足を半ばから筆り取られてしまっている事も堪らず無惨で、それでいてその豊かさを感じさせながらも若々しさと清楚さ、何より健康的な気品さを感じさせる姿態は否応なく人目を集めずにはおかない。さらに集まったのは官兵衛たちと同じく残忍無残なサディストたちなのに決まっているから、こうして激しく無残に苛まれている事さえも、その魅力をいよいよ増しているように感じられ、やってきた客たちの視線は否応なくそんな奈緒美へと激しく集中してくる。そして前もってこの生贄の情報に客たちに配布されていて、こうなった経緯も記載されていて、その事もなお一層そえられる。

「ほほう、いやこうして見ればなるほど美人だが、安威ちゃんのお嬢さんともなればなおさらそえられる。さて一体これからどうなってしまうのやら。」

「しかしこれは見れば見るほど美味しそうな…、いやいろんな意味でなお一層そえられる。」

「ところでこんなものを見せつけられるのは、ある意味蛇の生殺しのようなものではないか。接待してくれるのは有り難いが、それよりさっさと取り掛かって欲しいものだ。」

などとそんなことを口々に話しなどしている。

もちろん官兵衛だってその雰囲気を感じていて、奈緒美は適当な頃合いで礎柱から地面へと降ろされて早速に客たちはその周囲に集まってくるが、奈緒美はこれだけの人数がいることに新たな希望でも見出したのか、いよいよ必死な声を振り絞って、

「助けて下さい：お願い：お願い誰か助けて：ひあうう：ああう：あああつ：お願い何でも：何でもします：うあうつ：本当です：あああつ：あああつ：助けて下さい：お願い死にたくない：死ぬのはいやあーっ。」

と死に物狂いの哀願を繰り返し始める。しかし集った者たちは生憎この官兵衛たちが選りすぐったサディストたちなのだから、その哀れな心情に溢れたような声にも心を動かされるどころか、なおさらに嗜虐心やら劣情やらを刺激されるのに決まっている、そうすればするだけ鬼畜出おぞましい熱気はなおさら強くなるようだ。そしてまず官兵衛が満面に満足そうに面白そうに、言うまでもなく鬼畜で残忍な笑みを浮かべて進み出てくるなり、

「ふふふ、これは沢井奈緒美さん、私共の娘の安威の保母をしていただいていたお嬢さんですが、様々な因縁からこんな姿になってしまわれまして、その経緯もいろいろ刺激的な事もあります、それについては例のサイトでご覧いただくとして、もちろんもうご覧いただいた方もいらつしやいましょうから割愛いたします。さて本日は我々が腕によりをかけてまして、皆様のためにこの美しい奈緒美さんを料理し皆様に召し上がっていただく所存でございます。」

そしてそういうと、もちろんそれを目当てに集まっているにしても、こうしてその生贄を目の当たりにして聞けば格別のものがあり、中庭にはまさしく万雷といった拍手が起る。

ただし奈緒美はただひたすら怯え切って美しい目を大きく見開いて、そんな事をしても何の意味もないがその体を必死で後ずさらせていて、見ている者たちをなおさら喜ばせる。官兵衛もなおさら面白そうに、傍らのグロテスクな五歳児で一端以上のサディストの安威をさりげなく紹介しながら、

「と言ってもこれはただ私の娘、このお嬢さんが担当してくれていた安威からのリクエストなのです。と言う事は我々はもちろんお客様もこの安威のご相伴に預かる事になります、そんな事は気にしないことといたしましょう。」

などと言うものだから客たちはどつとばかりに沸き立つ。官兵衛はそんな客たちの反応に大いに満足といった笑みを浮かべていたが、鷹揚に手で客たちに一旦静まるように促しながら、

「もちろんこれほどのお嬢さんですからただ料理するだけではなく、最後の最後まで生かし抜いておきまして、鰯り殺しにされながら食べられていく恐怖と激痛と惨めさ、口惜しさ、そして絶望を存分に堪能させる所存ですし、さらにはお客さまにも様々にお手伝いいただく所存ですのでその時にはよろしくお願いしましょう。」

などと言うと、広場のあちこちから残どうする声が怒って官兵衛はいよいよ満足といった顔つきだ。

しかし当然の事ながら自分の運命について知らされてはいても、今の今までそんな恐ろしい事が本当に加えられるなど信じられずにいた奈緒美にとっては、その言葉は余りに恐ろしすぎてやっぱり理解を超えている。ただし自分がこんな姿にされてしまった事や、周

きたかといった顔つきのまのんがそんな奈緒美の無残で哀れな姿に満足するような笑みを浮かべ、

「ふふふ、本格的に料理するにはまず味付けをしてあげないと。」

などと話している間に、その体の下に権助と具足蟲によってほんのちよつと赤っぽい液体が入っている彼女の体がすっぽり入りそうな巨大なガラスの水槽が運ばれてくる。そして今度は権助が、そして具足蟲がいよいよ面白くて堪らないといった様子で、

「お客様方はまだまだお前の泣き狂いのたうち狂う処が見たいらしい。あんなにひどい目に遭わせてきたのにさすがに奈保が可哀相になってきたが、それだけそそられるのがサデイストだからな。」

「それに間違いなく痴れ豚奴隷を美味しく食べてやるためだから、くれぐれも俺たちを恨むんじゃないぜ。」

と声をかけたその次の瞬間、彼女を吊っていたロープが一気に緩められる。

そしてその次の瞬間、激しい水音と水飛沫とともにその体は一気に水槽の中へ胸元まで沈められてしまうのと同時に、奈緒美の目は蟻に無残に見開かれる。

「グギャウギャアアアアアッ：ああうっ：ぐああうっ：痛いーっ：ここから：ここから出して：痛いーっ：グギャギイエエーエッ：グウキヤアアアアッ：アヒギヤアアアアッ：うああ：ご主人様出して：お願い助けて：ご主人様助けて：。」

そして一層無残な声を張り上げて泣き狂い絶叫し、その体をまさに狂ったような激しさでのたうち狂わせ始める。半分になってしまっている手足が水槽のガラスを激しく叩くのが、それもその姿をさらに一層無残に刺激的にするだけの事でしかなくて、そして料理担当のまのんはそんな生贄の有様にいよいよ面白そうに、

「ふふふ、その液体は特別なビネガーの中にたつぷりと塩胡椒を入れて、その上にインド洋のどこかにあるらしいアブドゥーラ島とか言う島特産の果物から作ったりキユールや、東南アジアの飛び切り辛い唐辛子のエキスを色んなハーブのエキスを加えてあるものなんだぜ。そしてこれが人間の肉からその臭みを抜いてくれるのだから、それは痛いだろうけれども、とは言えお客様に満足していただくためだから我慢する事だな。」

などと面白そうに声をかけるとすぐに権助と具足蟲も、

「それにこれだけの量ともなると結構金だっつかかっている。まあその肌でじつくりと味わう事だ。」

「とはいえこんなことをわざわざ言っていることからして、やっぱりいたぶり苛むため感には正直ぬぐえないのだが。」

などと話しかけてくる。

そして当然の事ながらこんな事をぶっちゃけられてしまったのだから、その水槽の中の奈緒美のその無残な姿にその目をぎらつかせていた者たちの間からは激しい笑い声が起るのだが、ただし奈緒美からすればその無残に苛まれている体を炎であぶられながら無数の灼熱している槍で挟り抜かれるようないよいよ残酷な激痛に苛まれているような、余りに凄絶すぎる責め苦に耐えず苛まれていて、そんな言葉など聞いているどころではない。

相変わらず水槽の中でその体をいよいよ一層の激しさでのたうち狂わせながら、

「ギャウキヤアアアアアッ：ヒウギヤアアアアッ：ぎがあう：ギグウギヤアアアアッ：痛いよーっ：出して：痛いーっ：ググウキヤアアアアッ：ぎひああ：誰か助けて：誰でもいいから：グギヒイエエーエッ：ご主人様許してえーっ。」

とさらに一層無残な声を張り上げて泣き狂って泣き叫んで絶叫しながら、さらに激しくその体をのたうち狂わせていて、いよいよ無残で刺激的な姿をさらしまくって、飲み物もオードブルもそちのけで水槽の周囲に群がっているサデリストたちをいよいよ喜ばせ、ついでに自分自身に対する食欲までも刺激しなければならぬ。そして十五分余りでその水槽から引き上げられてしまうが、奈緒美はいよいよ一層無残な声を振り絞るようにして泣き狂い、哀願を繰り返すばかりだ。もちろんその体は全体が一層残酷な激痛に苛まれていて、まるで体そのものが今にも爆発してしまいそうだ。ただし何しろ生身の人間に叔父をしみこませようというのだから、ただ沈めるだけで済む訳がない。

下の水槽が一旦退けられるなり客たちの間からあのヒールのプロスラーと一際体格の立派な壮年の男が鋭い棘を一面に植えつけた長さが二メートル余り、見るからに恐ろしい鞭を手にして進み出るなり、

「なるほど、料理と言うからには味付けをしてやらなければならないと言うことか。これは面白いが、しかし最初から俺たちをそんなに刺激してどうしようと言うんだ。」

「しかし奈緒美ちゃんはちよつとぼつちやりしていてそこが可愛いのだが、その分味付けは大変そうだな。」

などと今にも口笛でも吹き出しそうなほどに楽しげな様子で話しかけてくる。ただしこれから処刑、さらに料理され食べられようとしている奈緒美は当然それどころではないし、水槽から引き上げられた処でその肌が残酷な激痛に苛まれている事には変わりはない。

「キヒアキアアアアッ：キヒイイイイッ：ああうっ：アヒキアアアアッ：ひあう：お願い助けて：誰か：誰か助けて：いやだあーっ：ヒアキイイイッ：どうして：どうして私食べられなくちゃ：いやあーっ。」

そういよいよ無残な声を張り上げて泣き狂い哀願し、そしてその体をいよいよ無残にのたうち狂って苦悶させているが、当然その度に豊か乳房が揺れて一番恥ずかしい処もむき出しになり、そんな美しい娘の姿をなお一層無残さを増している。

そしてその姿にさらに煽られたに違いない、早速にヒールのプロスラーともう一人の男の振るう二本の棘付きの鞭はそんな美しい娘の肌をいきなり滅多打ちに打ちのめし始める。

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ギャウギキイイイイッ：ヒアギアアアアッ：アウギアアアアッ：うああっ：グキアアアアッ：痛いーっ：許して下さい：痛いーっ：ぐあお：ギキイエエーエッ：お願い助けて：こんな事いやです：いやあーっ。」

もちろん鞭の音がいよいよ激しく響くたびにその既に傷だらけになっている肌に無残な条痕が刻まれ、肌が爆発してしまいそうな激痛にその体はいよいよ一層の激しさで、ち、その有様は当然無残で、特に無残に引きちぎられて半分になっている手足がのたうっさまがその姿をいよいよ無残にする。

そしてプロレスと壮年の男はその余りに無残に様によほど興奮しているのか最初のよ
うな言葉もなく、ひたすら手にしている鞭を振るい続ける。

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」
「ピュッシイイイイッ！」
「ピュッシイイイイッ！」
「ピュッシイイイイッ！」
「ピュッシイイイイッ！」
「ピュッシイイイイッ！」

「ギウヒギヤアアアッ：あおが：ギヒキイイイッ：グギャキャアアッ
：アギヒイイイッ：ぐあうっ：お願い許して：痛いっ：死にたくない：グアギキ
イイイッ：お願い殺さないで：痛いっ。」

もちろん鞭の音に交錯する奈緒美の絶叫はいよいよ一層無残で刺激的で、鞭打っている二
人も取り囲んで見ている客も、さらに官兵衛たちだつて大いに喜ばせずには置かないが、
鞭打っている二人の男もようやく最初の興奮から立ち直ってくる。

「ふふふ、泣き狂う声つて相変わらず可愛いし素敵だが、こんなものはまだ下準備だぜ。
今からこんなことでは本格的な料理に取り掛かったら一体どうなってしまうんだ。」

「と言うことはこれからの本番はもつと期待できるという考え方だつてあるし、どちらか
といえば私はそっちの方が好きだが。」

そして二人の男はそんな事をうそぶきながら、いよいよ一層の激しきで手にしている鞭を
振るい続けていて、奈緒美の苦悶と絶叫はいよいよ凄絶だ。

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

・ ・ ・

ようやくこの二人による棘付きの鞭による鞭打ちはやみ、奈緒美は十分すぎるほどに発
育した、しかしあくまで若々しくて魅力的な、しかしただでさえ無残な事になっている体
を新たな条痕と鮮血に血まみれになってしまっている。そして一層無残で哀れな声を振り
絞るようにして、

「ぐあうひ：グギヒイイイッ：ヒイイイッ：お願い助けて：痛いよう：痛い
っ：あぎうっ：ヒギイイイッ：お願い許して：殺さないで：グギイエエーエッ
：ひぐひっ：お客様助けて：お客様お願い：奈緒美を助けて：。」

といよいよ一層哀れに訴えていて、何しろ昨日あんな事をされた上でこうして鞭打たれて
地面には糞り取られた肌がボロボロの布切れの様に散らばっていて、それ佐生その姿をな
おさら無残にし、見ているサディストたちは当然いよいよ面白そうだし、こんなにも刺激
的な事がただの一度で切り上げられる訳がないし、たかがこの程度で肉に味がしみこむな

どと誰も思っていないで、もちろんその体の下には例の残酷な液体で満たされている水槽が運ばれてきて、奈緒美はその中へまでも一気に沈められてしまう。

もちろんさらに激しく苛まれた肌にアルコールやビネガーやスパイス、唐辛子のエキスマでもがしみこんでくる激痛は一層凄絶なのに決まっているし、それも二回目ともなればなおさらと言うものだ。奈緒美はこの前以上に激しく無残にその体をのたうたせ悶えさせながら、

「グアヒャギャアアアアアアッ：ヒアギャアアアアアッ：グウキヤアアアアアッ：うあがっ：痛いーっ：お願い助けて：痛いーっ：ヒアギエエエエッ：ぐうあ：アウギャアアアアッ：死ぬのは：死ぬのはいや：食べられるなんていやあーっ。」

といよいよ激しく無残に泣き狂い絶叫しのたうち狂い、さらに無残な姿をさらして水槽の周りで激しくその目と顔をぎらつかせているサディストたちをたつぷりと喜ばせて楽しませずにはなおかないし、さらにこれはやっぱり料理なのだから味付けはじっくりと行わなければならず、奈緒美は今度はたつぷり三十分もその液体に漬け込まれてしまつて、引き上げられるなり水槽はまた脇に退けられるなり、また違う二人の客が、その目を激しく、獣地味でぎらつかせて既に奈緒美自身の鮮血にヌラヌラとてかっている棘付きの鞭を手に進み出してくる。

「ふふふ、第二ラウンドといこうか。可哀想に、両親だつてがまさか自分の娘が自身の担当している園児とその家族に捕らえられて、まさか食べられようとしているなんて想像だつてできないのだろうな。」

「なるほど、そう思えばの様は一層刺激的だが、そんなことをごちゃごちゃいうのも勿体ない。さつさと始めようぜ。」

そして二人はそんな事を言いながら、またもそんな奈緒美の体を、多分に意識しているに違いない、さつきの二人に勝るとも劣らない激しさで滅多打ちに打ちのめし始める。

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「グウギャアアアアアアッ：ぐぎあっ：ギヒキヒイイイッ：ギヒャキヤアアアッ：お願い助けて：ご主人様お願い：痛いよーっ：ヒアキヤアアアアッ：こんな事やめて：痛いーっ：痛い：こんな事いやだ：グウキイイイイッ：。」

鞭の音が響くたびに奈緒美の朽ちるからは一層無残な声が連続してほとぼしり、のたうち狂つて苦悶する肌からは血と例の液体の混じったものが激しく飛び散つてそのさまをさらに無残にする。

「ひふふひ、ひひっ、いうに事欠いて『ご主人様お願い』か、あいにく僕たちはご主人様なんかではないのだけれども：。ま、そんな事はどうでもいいかな。」

「画面で散々見てはいいても、やっぱり自分で苛むのはやっぱり別格の気持ちよさなのに、全くどうでも良いことだな。」

そして二人の男はそんな生贄の無残な様にいよいよ残忍で満足そうな笑みを浮かべ、そんな事を楽しげに話し合いながらさらに激しく鞭を振るい続ける。

「ピュッシイイイイッ！」 「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」 「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

「ピュッシイイイイッ！」

鞭打ちが終わった時、奈緒美は息も絶え絶えといった有様で喘ぐばかりになっているが、しかしもう権助や具足蟲の手を煩わせるまでもないとばかりに客たちがまた水槽をそんな奈緒美の体の下に運ばれてくるなり、そしてもう情け容赦もなくそんな哀れな美しい娘の体はその中へと激しく沈められてしまつて、もちろんその激痛は余りに凄絶なものに決まっている。こんなに苛みつくされているとは思えない勢いでその体を悶えのたうたせ、

「アギヤヒギイイイイッ：あぐあう：ウグギヤアアアッ：ヒヤキヤアアアッ：アグキヤアアアッ：あうあぐ：お願い助けて：痛いーっ：死にたくない：ひぐえっ：痛いーっ：アグキイイイイッ：死にたくない：お願い殺さないでえーっ。」

と泣き狂つて泣き叫んで哀願を繰り返し、もちろんその様はなおさら無残で哀れで刺激的で、取り囲んでいるサディストたちの目はなおさら激しくぎらついている。そして存分にその恐ろしい調味液に漬け込まれたら水槽から引き上げられて、そしてその恐ろしい激痛に苛まれる肌は新たな客たちの振るう棘付きの鞭により叩きのめし放題に叩きのめされて、それはそれで恐ろしい地獄なのに決まつていて、なお激しく取り囲む無数の嗜虐者たちの劣情を掻き立てずにはおかず、そして態々こんな島にやってきた客にとつては絶好のアペリティブだが、ただしアペリティブはあくまでアペリティブで余りがぶがぶ飲むものではない。それにいくら漬け込んでも味がつくのは所詮表面だけなのだから、それは四度で切り上げられる。

奈緒美はやつと芝生の上に降ろされて、しかし当然の事ながらそのままぐったりと地面にへたり込んでしまつている。そんな処を髪を掴んで引き起こしたまだ五歳児の安威でいよいよ何とも面白そうに無邪気に、そしてそれだけなおさら残忍に、

「ふふふ、実を言ったならば私、奈緒美先生を最初に一目見たときからとっても美味しうと思つていたの。もちろん厭らしい意味ではなくって、もつと即物的な意味でだけれど、こうしてみたらやつぱり奈緒美はいよいよ美味しそうだし堪らなく美味しそう。きつとみんなだつてそう思っているんだろぅけれどもね。」

と声をかけてくる。そして奈緒美は自身が担当していた園児だけになおさら堪らないのに決まつている、そんな安威に何とも哀れな視線を向けていたが、やつと絞り出すかのような声で、

「助けて下さい：お願い安威様：お願い殺さないで：うあぐっ：食べたりしないで：ぐぎううっ：あうあう：ギヒキイイイーイッ：ヒイイイーイッ：こんな事いやだ：痛い：痛いよーっ：アグギイエエーエッ：お願い安威様許して：死ぬのはいやあーっ。」

と訴え始めていて、保母なのにこんな子供にこんなに惨めに哀願しなければならぬのだから、その姿は余りに無残だし今日初めて目にする客たちからすればなおさら刺激的で、その有様はさらに一層哀れで他の見ている者たちだつて一層喜ばせずにはおかぬ。そしてその安威はそのまま奈緒美の顔を権助と具足蟲が立ち働いているほうにねじ向けて一層面白そうに気持ちよさそうに、

「ふふふ、痴れ豚奴隷の奈緒美先生、あれを見てご覧。これから奈緒美先生はあの上に渡されてまさしく豚の丸焼きのようにその体丸焼きにされるのよ。ふふふ、ひふふ、とつても美味しそうだとは思わない。」

などと話し掛けてくる。

そしてそこでは地面に長方形の穴が掘られていてその中には大量の炭火が盛大に燃え上がっており、そしてその両側にはY字型の支柱が立てられていて、その間には太さが五センチほどの、そして両側には大きなハンドルのようなものを取り付けられている木製の棒が渡されていて、最初は不審そうだった奈緒美もすぐにそれに気づいたに違いない、可憐な顔がすぐに凄まじい恐怖に強張ったかと思うとその体がさらに無残にのたうって、

「いやだあーっ：ひあきっ：お願いご主人様：安威様助けて：アヒキヒヤアアアッ：ヒキヤアアアッ：ああうっ：ヒイイイーイッ：そんな：そんな事絶対にいやあーっ：お願い許して：キヒイエエーエッ：誰か助けてえーっ。」

と泣き狂いながら訴え、さらに何とか逃れようとしているかのようにその体をいよいよ激しく悶え狂わせるが、安威はどうやら五歳児とは思えない怪力らしくてその動きを完全に封じていて、それどころかずるずると芝生の上を機のくいの方へと引きずっていき、もちろん奈緒美はなおさら無残に泣き狂い悶え狂い、その姿は見ている者たちをいよいよ喜ばせずにはおかぬ。さらに権助と具足蟲はその炭火の間に渡されていた木の棒を持ってくるなり、そんな奈緒美の体をそれに仰向けに、その手足を伸ばして容赦なく縛り付けていく。

もちろん奈緒美はいよいよ恐ろしいのに決まっについて、残っている力を振り絞るようにして悶えのたうって無残に泣き狂い泣き叫んでいるが、もちろんサディストたちはなおさら一層面白そうだ。

「ひひひ、ひふふ、こんな姿になってしまったのだから、いまさら生きていたって仕方がないだろう。とは言え自分が担当する園児に食べられるこんな可愛い保母さんなんだから、なおさらこうでなければ面白くないというのはある。」

「全く、従容として自分の運命を受け入れられるなんて真っ平だし。」

「しかもこいつの場合は殺されながら食べられてしまうだから、なおさらこうでなければね。」

そんないよいよ面白そうな言葉が激しく交錯し、その雰囲気をおさら盛り上げていく中、安威は安威でいかにも面白そうに、

「やっぱりお前のそのきれいな顔はそのままできてくれたほうがそられるからね。こんなものを縫ってあげる。」

などと言いながらこの哀れな生贄の顔から髪にかけてクリームのようなものを丁寧に塗り込んでしまつて、それが終わると奈緒美はその縛られた棒ごとその支柱の間に渡される。

そして両端に取り付けられたハンドルに取り付いた客たちにより、まさしく丸焼きにされる豚そのままに炎の上でその体をくるくると回され始める。そしてもちろんこの美しく魅力的なだけ哀れな生贄は、思い切り無残な声を振り絞って、

「グヒヤウギヤアアアアアッ…グヒキヤアアアアッ…ウアギヤアアアアッ…ああお…お願い助けて…熱いわ…熱いよーっ…アヒギイイイイッ…あああ…あひあつ…お願い許して…こんな事いや…絶対にいやだあーっ。」

と無残に泣き狂い泣き叫び哀願を繰り返し始める。その手足は柱の背後に回されて各々手首と足首で一つに縛られていて、そのためそのすぐ下で燃え盛っている炭火の熱気は、いよいよ残酷にその肌を苛むうえに、さらには泣き叫んでいる口からなだれ込んで肺などの臓器までも焼き尽くしてしまいうえだ。そしてもちろんこんなにも美しく可憐で、その上に官兵衛たちや鶴居や黒岩たちからすれば自分たちで散々に嬲り者にし苛みつくしたのだから、その姿は猶更一層無残で刺激的なのに違いない。さらに食欲までも激しく刺激するに違はなく、あの女男や醜娘に至っては早くも舌なめずりをしている。さらにきつとさつき漬け込まれていた液体の効果なのか、辺りに漂う臭いは普通人肉を焼く時の脂身の魚を焼くような異臭ではなく、肉を焼く特有の何とも食欲を刺激する匂いに甘さとスパイスの入り混じった芳香が漂っている。ただし奈緒美にとっては地獄で、それもこうして丸焼きにされて食べられてしまうのだから、飛び切り残酷な地獄なのに違いない、

「あぐあひ…お願い助けて…誰か助けて…いやあーっ…アグヒギヤアアアアアッ…ウギヤアアアアッ…グヒキイイイイッ…熱いわ…熱いよーっ…お願い許して…うあぐっ…グギウギヤアアアアッ…死にたくない…死ぬのはいやあーっ。」

奈緒美の絶叫と哀願は一秒の休みもなく当たりに響き続けている。

もちろんそんな美しい生贄の娘の無残というにも余りある様に取り囲んでみている客たち、官兵衛たちの目と顔を激しく妖しくぎらついてきて、そしてようやく冷静さも取り戻してきて紀伊が一層面白くて